シュリー・シヴァ・マヒムナ・ストートラム

「シュリー・シヴァ・マヒムナ・ストートラム」、すなわち「シヴァの栄光への賛歌」は、インド中で最も有名で愛されているサンスクリット語で書かれたシヴァ神をたたえる詩の一つです。この賛歌は、シヴァ神の信奉者だったプシュパダンタというガンダルヴァ、天上の音楽家の作とされています。伝説によると、プシュパダンタはある時、神の崇拝に使われるビルヴァの葉を無意識のうちに踏み、シヴァ神を怒らせました。過ちを償うために、プシュパダンタはこの壮大なストートラムを創作し、シヴァ神にささげました。シヴァ神はとても喜び、彼の信奉者が不注意で引き起こしたかもしれないどんな罪も即座に許しました。

天上の音楽家ということから予想できるように、詩節はサンスクリット語の詩的な韻律で構成され、叙情的なメロディーで歌われるのに適しています。幾つかの詩節は、シヴァ神が信奉者に示す無限の恩情と慈愛はもちろんのこと、存在するものすべてに勝る比類ない力を描く有名な物語を引き合いに出し、シヴァ神をたたえ歌います。他の詩節はより哲学的であり、瞑想のゴールとして、宇宙のあまねく広がる源であり維持するものとして、感覚やマインドを超えて存在しているものとして――つまり、サーダナーのゴールである内なる大いなる自己として――シヴァ神をたたえています。

そのようなある詩節は言います。

「実現に至るいろいろな道は、三つのヴェーダ、サーンキャ、ヨーガ、シャイヴァの教義、そしてヴァイシュナヴァのシャーストラによって示されている。人々は、どれが最良であるか、あるいは自分の気質に最もふさわしいかを考えた上で、それぞれ真っすぐな、あるいは曲がった道を進

む。しかしすべての道は、まさにさまざまな川が同じ一つの大海に流れ込むように、あなたに至る」[1]

「シュリー・シヴァ・マヒムナ・ストートラム」は、1976 年にシュリー・グルデーヴ・アーシュラムでバーバ・ムクターナンダが始めたシッダ・ヨーガ・アーシュラムの日課の一部として朗唱され、今日でもシッダ・ヨーガの道でしばしば朗唱されるスワーデャーヤの教典です。長年にわたってグルマーイ・チッドヴィラーサーナンダは、シッダ・ヨーガ・アーシュラムや世界中の教えの旅で、しばしば「シュリー・シヴァ・マヒムナ・ストートラム」の朗唱を導いてきました。

© 2021 SYDA Foundation®. 著作権所有。

[1] *The Nectar of Chanting,* rev. ed. (South Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 1984), p. 140.